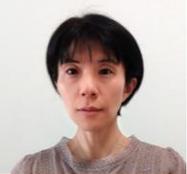


英語教育講座 米倉 よう子 教授



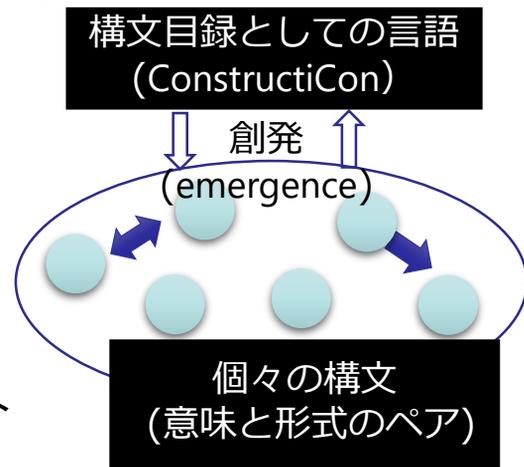
言語変化

キーワード 言語変化/ 構文ネットワーク/ 構文目録/ 文化多様性/

どのような研究をなぜ行っているか

学生の頃から言語変化の過程 (例: cunnan 'know how to' > can) を知るのが好きでした。現在、興味のある研究テーマは、**言語変化分析を通しての「複雑系 (complex system) としての言語」の解明**です。具体的には、**英語受益者受動** (例: She was given the title of Empress Dowager.) の発生と拡大や**英語進行形の「解釈的用法」**の発生過程を調べています。

- ・言語体系は意味と形式のペア (これを「**構文**」とよぶ) の集まり、すなわち「**構文目録 (ConstructiCon)**」である。
- ・言語では、構文間の局所的な相互作用が起こる。その相互作用によって、言語体系全体の性質も変化しうる。その全体的な性質がまた、個々の構文の性質に影響することもある。
- ・言語はさまざまな構文が互いに影響しあう**ネットワーク構造**を成す。



研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

言語の機能がどのように変わってきたのかを解明することは、大局的に言えば、「**人間はどのように環境と関わっているのか**」の解明につながります。言語変化を研究すればするほど、そこに関わる要因の多様さに圧倒されるのですが、これは我々人間を取り巻く生態・社会環境的要因にもなぞらえることができるのではないのでしょうか。

教育面に目を向ければ、言語機能への理解の深化はSDGsの17目標の4番目「**質の高い教育をみんなに**」の下位ターゲット「**文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育**」実践に関わります。英語教育では近年、World Englishes や Globish等の用語が一種の「**流行り言葉 (buzz term)**」となっているようですが、これらはまさに、「**言語間の差異と共通性の理解**」に直結しています。社会言語学でしばしば指摘されるように、言語変種に基づく差別は根強く残っていると云わざるをえません。肌の色ではなく、どのような話し方をするのか (たとえば日本語なまりの英語、英語なまりの日本語) に基づいて差別を行うのです。この**言語に基づく差別の根絶**にも、言語変化の解明は役に立つと考えています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- ・帝塚山高等学校SELHi事業支援活動 (講師・指導補助) (2005)
- ・桜井高等学校出前授業 (講師) (2005)
- ・帝塚山高等学校東大寺英語ボランティアガイド活動 (講師・指導補助) (2006,2009)
- ・Nara Kids English Podcast (2019)
- ・現職教員のための公開講座 (2019)
- ・日本認知言語学会全国大会開催校委員 (2011)
- ・日本英文学会関西支部編集委員 (2019-2020)
- ・日本英文学会関西支部大会委員 (2021-) など。